

平成30年6月18日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01772

研究課題名(和文) かつての子どもの語りからみる戦後沖縄のアロケアに関する研究

研究課題名(英文) Research on Allocare from Interviews with "Children of the Past" in Postwar Okinawa

研究代表者

岩崎 美智子 (IWASAKI, Michiko)

東京家政大学・家政学部・教授

研究者番号：90335828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後沖縄においてアロケアを受けた「かつての子ども」を対象として、彼らの生活と経験、自立過程における他者とのつながりの意味を愛情のネットワークの視点から考察した。

研究の結果明らかになったのは、以下の4点である。1) 児童養護施設は、日々の生活保障の場であると同時に、「負」の側面も持っている。2) 施設保育士は、退所者の相談相手であり、自立を助ける「重要な他者」である。3) 施設退所後の安定した生活に必要な要因は、配偶者との良好な関係と親しい人との継続的な関わりであるが、ジェンダー差が認められる。4) 本土復帰以前の沖縄の託児所は、「保育」の場というよりは「社会的養護」の役割を担っていた。

研究成果の概要(英文)：This research studies "children of the past" who received allocare in postwar Okinawa, focusing on the importance of affective relationships in their day-to-day lives, their experiences, the process of becoming independent adults, and more. Our work revealed the following four points: 1) while the child care institutions of postwar Okinawa were places that provided basic day-to-day life needs, they also carried a negative side; 2) nursery teachers, who gave advice to care leavers, were "significant others" in the process of the children becoming independent adults; 3) key points in stability of life for care leavers included a good relationships with their spouse and ongoing interaction with other people close to them, though there were differences between men and women; and 4) childcare facilities in Okinawa prior to the mainland played more of a social care role than a childcare role.

研究分野：福祉社会学

キーワード：アロケア 児童養護施設 かつての子ども 自立 愛情のネットワーク

### 1. 研究開始当初の背景

近年、社会的養護への関心が高まり研究成果の蓄積も進んでいるが、社会的養護を受ける子どもの問題は、貧困や社会的排除との関係、養護問題の発生要因、養護実践課題といった観点から議論されることが多く、ともすれば、子どもたちの低学力や社会的孤立といった負の側面のみが焦点となりがちである。貧困対策は最優先課題であり子どもの社会的不利は払拭されなければならないが、対象である子どものとらえ方が一面的だったとはいえないだろうか。

子どもは、幼少期の家庭や親によって決定的に規定されるだけの受け身の存在ではなく、さまざまな他者との出会いと体験によって成長していく。そこで着目したのが、親以外の人による養育を意味する「アロケア」と、子どもの自立を支える周囲の人間との関係のあり方を考えるソーシャル・ネットワーク（愛情のネットワーク）の視点である。愛情のネットワーク理論では、複数の重要な他者からなる人間関係を、「人」と精神的な安定を支える「心理的機能」が結びついたセットの集合体ととらえ、個人にとって誰がどのような意味をもつかといった役割が分担されていると考える（高橋、2010）。人は、挫折や別れ、死の受容といった困難や危機に際しては、現実的にも象徴的にも「誰かとつながっている」という実感によって支えられるものである。つまり、自立に必要な精神的安定は、他者に甘え、頼り、依存し、さらに他者に必要とされることによって可能になる。そこで、本研究では、施設職員（保育者）による子どもの養護を「アロケア」ととらえ、施設でのケアと退所後の関わりがもたらす保育者 子ども間の関係性の構築と、職員以外の人びととの人間関係のネットワークについて検討することとした。

対象地域として沖縄を選択した理由は、米軍基地の存在や貧困率の高さといった子育

ち・子育てが難しい社会・経済的要因を抱えながらも、子どもを社会の宝と考える文化が残っていることによる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後沖縄において社会的養護を受けた「かつての子ども」を対象として、彼らの生活と経験を語りによって描き出し、自立の過程を記録するとともに、子ども期における他者とのつながりの意味を、おもに保育者との関係を通して考察することである。

親以外の人による養育行動は「アロケア（allocare）」あるいは「アロマザリング（allomothering）」と呼ばれるが、社会的養護は「制度化されたアロケア」といえる。家庭の事情により児童養護施設で生活することになった子どもたちが、成長過程で遭遇した挫折や葛藤、喜びや悲しみは何だったのか、特に、困難や逆境をどのように乗り越えたのかを分析する。そして、そのとき支えとなった人や出来事について愛情のネットワークの視点から検討を加える。

### 3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、つぎの方法で研究はおこなわれた。まず、愛情のネットワーク理論やレジリエンスの先行研究を整理したうえで、対象者たちが施設で生活していたときの時代背景や沖縄の社会的な出来事を確認し、居住地域それぞれの概要や特色を調べた後、インタビュー調査に臨んだ。対象地域は本島中部・南部、離島、本土など4箇所、30代から50代の施設退所者17人を対象に、原則として同じ対象者に2回（研究期間1年目と2年目）、個別のライフストーリー・インタビューを実施した。

つづいて、インタビューデータに基づき、当事者である「かつての子ども」が施設生活というものをどのようにとらえていたかを

分析し、施設入所中と退所後の人間関係について、相談相手や関わりの頻度、危機や困難に直面したときの対応等を検討した。

さらに、収集した対象者の語りから、ネットワーク理論（Lewis 2005、高橋 2010）に照らし合わせて心理的機能を整理して、周囲の人の役割と機能を考察し、ネットワークモデルの有効性についても検討した。また、対象者の養育を担当していた元保育者や児童福祉関係者への聞き取り調査も実施し、1960年代から90年代当時の児童福祉・保育施策に関する資料を収集し、分析の際に参照した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 子どもにとっての施設生活

1970年代から1990年代に児童養護施設X園で過ごした「かつての子ども」たちの語りから、子どもたちが施設生活における他者（職員、子ども同士）との関係性をどのように形成し、いかにして施設生活に適応しようとしていたのかを検証することをめざした。それは、換言すれば、「施設で暮らす」ということが、当の子どもにとってどのような意味をもつ経験なのかを考察することである。E・ゴフマンが『アサイラム』において描いた施設被収容者の自己の構造理論をてがかりにして、( )施設に入所すること、( )職員と子どもとの関係、( )統制のプロセス、( )子ども同士の関係、( )施設生活への適応と退所をめぐる不安、といった観点からの考察を試みた結果、明らかになったことは、つぎの5点である。施設という集団生活では規則が多く、職員の統制が強く働いている。

子どもたちは、ケアを受ける立場であることから、規則を守ることと職員への従属を求められる。罰則は、家庭でのそれと比べて厳しいものであり、秩序化のために統制への抵抗は許されない。力の行使は、職員から子どもに対するものだけでなく、子ども同士の日常にも蔓延している。しかも、それは、

職員の黙認が導いた結果でもある。子どもたちは、自己の剥奪や無力化の過程においても施設生活への適応に努めるが、いっぽうで、適応の結果、退所への不安が生まれてしまう。

分析対象とした語りは、前述のように1970年代から1990年代の施設生活についてであったため、子どもの権利擁護や人権に対する考え方は現在とは異なる面があることは否めない。しかし、施設で暮らす当の子どもにとって、児童養護施設は、安全で安心できる居場所という家庭の代替機能をもつ生活の場であると同時に、集団生活に起因する制約や、職員による統制、子ども同士の間を生じる問題といった「負」の側面を生み出す可能性があることを指摘した。

##### (2) 「重要な他者」である施設保育士

児童養護施設で生活する子どもの自立を考察するにあたり、子どもの立場からみた保育士（養育担当職員）の役割や存在について検討した。

東京都福祉保健局調査（2011）によれば、児童養護施設を退所した子どもたちの退所直後の悩みは、「孤独感、孤立感」（29.5%）と「金銭管理」（25.4%）、「生活費」（25.1%）が多い。そして、悩みに関する相談相手は、「施設職員」（40.0%）が最多回答であり、「誰にも相談しなかった」が16.8%であった。これらの先行研究をふまえて、本研究でも30代～50代の男女17人（施設で生活したのは、1970年代～1990年代）へのインタビューの際、施設職員との関わりについて訊いた。その結果対象者から語られたのは、施設在園当時に、体罰や理不尽なことを訴えても対応してくれない男性指導員が一部にいたものの、無断外泊したり万引きした自分のことを本気で叱り、精神疾患をもつ親のことや施設退所後の生活を心配してくれた保育士の存在が心の支えになり、おとなへの信頼を持つことができたということであった。このように、

子どもたちは、自分自身と正面から向き合ってくれることがわかったとき、その人が信頼に値するおとなであると判断していた。さらに、施設退所後も、困ったことがあると自分から保育士に連絡をとる人が特に女性は多く、保育士から電話や訪問を受けることに対しては大半が受容的であった。加えて、保育士が声かけをして年に1回行なう同窓会が、友人同士の再会や継続的な関わりの契機となっていた。

それでは、彼/彼女らにとって保育士はどういう存在だったのか。「子ども時代」と「現在」の比較をすると、過去(子どものころ)は、「恐かった」、「管理する人」、「忙しすぎる」と否定的にとらえることもあったが、現在(おとなになってから)は、「親のようだ」、「親戚みたい」と保育士への評価が変化していた。「親ではない」が、「重要な他者」のひとりであるという認識である。また、施設保育士の専門性については、どのように考えているのか。子どもの「現在(いま)」が重要であることは大前提として、長期的な視点をもって子どもの養育ができること、ひとりひとりの子どもの個性や置かれた状況を見極めてアドバイスできること、子どもの退所後も何らかの関わり(つながり)が保てること等を、自らの経験をふまえて語った。

### (3) 施設在園中と退所後の「自立」を支える愛情ネットワーク

児童養護施設で生活する子どもの自立を可能にする要因を検討するために、子ども時代から中年に至るまでの人間関係に着目した。現在は家族とともに安定した生活を営んでいる成人男女にインタビューを実施して、彼らにとっての「重要な他者」と、その具体的な関わりについて考察した。

人間関係の心的枠組みは、複数の「重要な他者」で構成され、役割が分担されている。心理学者の高橋(2010)によれば、精神的な

安定を支える心理的機能は、近接を求める、情緒的支えを求める、行動や存在の保証を求める、激励や援助を求める、情報や経験を共有する、養護する、の6種類がある。

施設退所者の「自立」に影響を与えた要因を考察するにあたり、誰とどのくらいの期間、どのような関わりをもっていたかを問い、施設在園中の人間関係と、卒園後困難に直面した際の「重要な他者」(相談相手や支えてくれた人)について検討した。その結果、【男女に共通だった点】は、配偶者のいる人は配偶者と良好な関係性を保っていて、他の人には話せないことを相談できていた。子どもについての悩みや、親族とのトラブルを一緒に考えてもらい、借金や病気をともに乗り越えた。きょうだい・親族や施設職員(保育士)と、継続的な関わりを続けており、保育士は、退所者の結婚・出産や彼らの子どもの誕生日や入学・七五三といった節目にお祝いの品を贈ったり、年に1度の同窓会に出席するよう電話をかけていた、であった。【男性に特徴的だった点】としては、友人ネットワークは稀薄であり、男性の友人同士で会うことは少ない。しかし、職場・地域社会・家庭における自己有用感が自立に影響していた。職場の上司に仕事で期待されること、少年スポーツのコーチを続け子どもや親から感謝・尊敬されること、シングルファーザーとして子どもたちを責任を持って育てること、などである。つまり、高橋の挙げた心理的機能のうち「行動や存在の保証を求める」が顕著であった。それに対して【女性に特徴的だった点】を述べると、女性たちには、友人とのつきあい、特に、互いの生い立ちを知る施設退所者同士という特別な存在があった。それは、「友人」というよりも、「家族」や「同志」というべき間柄であり、交流が長期間続いている場合には、生活上の困難や危機を乗り越える手立てになっていた。これら

は、心理的機能のうち「情緒的支えを求める」、「激励や援助を求める」、「情報や経験を共有する」、「養護する」が指摘されたことになる。

#### (4) 本土復帰以前の沖縄における託児所でのアロケア

アロケア(社会的養育)が行われる場合は、児童養護施設だけではない。多くの住民に身近なアロケアの場である保育所(当時は、託児所)について、1960年代前半に託児施設を始めた2人の女性の語りを中心に、市史や児童福祉・保育関連文献、統計資料を確認しながら、「基地の街」での暮らしと保育所開設までの道のりを考察した。

1945年の敗戦後GHQが統治することになった日本は、1952年4月28日サンフランシスコ講和条約の発効により主権を回復したが、日本から切り離された沖縄は、1972年5月の本土復帰まで米軍の施政権下におかれた。米空軍嘉手納基地に隣接する「基地の街」であるコザ市(現沖縄市)は、沖縄中部の中心都市で米兵相手の商売(飲食・観光)に従事する人が多く、1950年6月に勃発した朝鮮戦争によって沖縄駐留の米軍要員が増加したことから経済は潤っていたものの、市内の特飲街では人種的分離や人種差別がおきていた。北部や離島から多くの女性たちがコザに働きに来ており、また1960年代の沖縄では他県と比べて生別母子世帯の割合が高かったこともあって、保育需要は多かったといえる。

1960年代の保育施策と保育実施状況を顧みると、本土においては保育所の整備が進んだ時代だが、沖縄では1964年度からの日政援助(日本政府援助)で保育所建設事業が始まるものの、公的な支援は充分ではなく、私的な託児が一般的であった。

コザ市内に作られた託児施設としての「ベビーセンター」や「託児所」は、働く親に代

わって日中だけ子どもの面倒をみる保育所本来の機能だけでなく、婚姻外出生や障がい理由に遺棄された子や、いわゆる「未婚の母」など切迫した事情で養育困難をきたしている困窮母子家庭の子どもを24時間保育するという緊急避難所的な一面を持っていた。保育者たちは、年中無休での保育や国際養育縁組の手続きをするなど、乳児院の保育士(当時は、保母)やソーシャルワーカーに近い仕事もおこなっていた。暴力と性が蔓延する街で、保育者たちは、眼前に子どもの生をつきつけられ放っておけないという現実や劣悪な保育環境をなんとか改善したいという理想主義から、身を粉にして働いていたのである。彼女らが作った託児施設は、家庭養育を補完する「保育」の場というよりは、むしろ家庭養育の代替である「社会的養護」をおこなう児童福祉施設としての役割を担っていた。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

岩崎 美智子、「基地の街」の保育所前史 - 本土復帰前の沖縄・コザにおける託児施設 -、語りの地平、査読有、創刊号、2016年、pp. 5 - 26

岩崎 美智子、施設で暮らすということ - 子どもの生活をゴフマンの『アサイラム』で読み解く試み -、東京家政大学博物館紀要、査読無、第21集、2016年、pp. 1 - 13

松本 なるみ、青少年にみる「養護性」の形成と発達、東京家政大学研究紀要、査読有、第58集(1)、2018年、pp. 83 - 90

[学会発表](計6件)

IWASAKI Michiko

Social Networks in Support of the Independence of Care Leavers, 69<sup>th</sup>

OMEP World Assembly and  
Conference , Opatija,Croatia,2017

IWASAKI Michiko

Affective Relations of Children Living  
in Child Care Institutions,68<sup>th</sup> OMEP  
World Assembly and Conference ,  
Seoul, Korea, 2016

IWASAKI Michiko

Narratives of Adults Who Experienced  
Child Care Institutions as Children:  
Life in the Institutions and Role of  
Nursery Teachers,67<sup>th</sup> OMEP  
International Conference , Washington  
DC, USA, 2015

MATSUMOTO Narumi

Called the “Village of Foster Children”  
Before World War in Japan , 69<sup>th</sup>  
OMEP World Assembly and  
Conference , Opatija,Croatia,2017

MATSUMOTO Narumi

Socialization of Children Requiring  
Home-Based Living Care in Japan ,68<sup>th</sup>  
OMEP World Assembly and  
Conference , Seoul, Korea, 2016

MATSUMOTO Narumi

Social Care for Children in Japan:  
Focusing on Family-Like Care and  
Family- Based Care,67<sup>th</sup> OMEP  
International Conference , Washington  
DC, USA, 2015

6 . 研究組織

( 1 ) 研究代表者

岩崎 美智子 ( IWASAKI, Michiko )

東京家政大学・家政学部・教授

研究者番号 : 9 0 3 3 5 8 2 8

( 2 ) 研究協力者

松本 なるみ ( MATSUMOTO, Narumi )

東京家政大学・家政学部・准教授

研究者番号 : 7 0 4 4 2 0 2 7